

---

## 彼女の秘密 2

Mu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女の秘密2

### 【Nコード】

N0240E

### 【作者名】

Mu

### 【あらすじ】

ちよつとエッチな秘密を持つ彼女と付合うことになった僕。ふたりの初めてのデートの日。”僕”は、きっと素敵な日になると確信するが……さて？前作『彼女の秘密』の続編です。これだけでも楽しめますが、できれば僕と彼女の告白話、『彼女の秘密』も読んでみてくださると嬉しいです。春エロス2008参加作品です。

## 1ーきつと素敵な日になるー（前書き）

前作『彼女の秘密』に、

「もう少し長く読みたかった」「続編があれば読んでみたい」  
などという、作者感涙のコメントをいただいて、感激して書いて  
みました。

前作同様よろこんでいただけるか、もう、ドキドキです。

## 1ーきつと素敵な日になるー

駅の改札前に、彼女はすっと立っていた。

まるで、まわりの景色から浮き上がっているみたいに、その姿が輝いて見えた。

彼女の着ている膝上丈の薄い水色のワンピースは、少し大きめのボタンが上から下まで綺麗に並んでいた。

夏用のデザインなのか、胸元が大胆にカットされている。

それを隠すように彼女は、白いサマーセーターを羽織り、太陽の光を避けるための少し幅広の帽子を被っていた。

やって来た僕に気づいて、彼女が笑顔で小さく手を振った。

わあ！ その笑顔がすごくかわいい。

「お、おはよう」

しまった！ もう昼過ぎなのに、なんでこんな挨拶をしてるんだろう？

「あ、うん。おはよう？」

彼女が首を傾げ、笑いながら返してくれる。

うー、しあわせ。

今日は、きつと素敵な日になる！

僕はそう確信した。

夏休みに入って、彼女とクラブ以外で会う初めての日。

初めてのふたりだけのデート。

朝から僕はわくわくしていた。

あの日、一学期の最後の日。

彼女は僕に秘密を打ち明け、僕はそんな彼女をもっと好きになった。僕は恋人になったんだ。

それから一週間。

いろいろと忙しくて、ふたりつきりになることも、一緒に帰ることもできなかったけれど、ようやく、この日がやってきた。

そう思うと、なんだか緊張してくる。

「どうしたの？」

彼女がそんな僕を見つめて訝しそうに訊いた。

「あ、ううん。なんでもないよ」

「そう？」

「うん。じゃあ、行こうか？」

僕は改札に向かって歩き出した。

電車に乗って10駅以上。

僕らの住む町からけっこう遠い都会に出ないと、今日の目的地の映画館はない。

改札を抜けてホームに上がると都合よく電車が滑り込んできた。

ラッキー。今日は幸先がいいぞ。

「これ、乗ろうー！」

「うん」

電車の起こす風に飛ばされないように彼女が帽子を押さえながら笑顔で肯いた。

ううん。かわいいなあ。ドキドキしてくる。

乗り込んだ電車は、昼だけと適度に込んでいた。やっぱり都会行きだけのことはある。

ふたり並んで座れそうにないな。

僕は座席の端の空いている場所に彼女を促した。

「え？ いいよ。立ってる」

「でも、けっこう時間掛かるから、座ってなよ」

「そう？」

「うん」

彼女は、じゃあ、といって座席に腰掛けると、帽子を取ってちょこんと膝に乗せた。

それから顔をあげて、僕を見上げると楽しそうに笑う。

その笑顔が、めっちゃくちゃ、かわいい。

うー、俺、大丈夫かな？

最初からこんなにドキドキしてたら、今日死ぬんじゃないだろうか？

そんなおバカなことまで考えてしまう。

それから、ふたり、お昼御飯はなにを食べてきただとか、今日は、なんの映画を見たいとか（シネマコンプレックスだから、行つてから見たい映画を選べるんだ）、映画を観終わったら、どこに行きたいだとか、そんな今日の予定を話した。

屈託なく笑う彼女の笑顔が本当にすてきだ。

そのうち電車は走る方向が変わったのか、彼女の後ろの窓から夏の光が降り注ぐようになった。彼女が眩しそうに窓を見上げた。

「下げようか？」

「うん」

僕は、ちよつと窓の方に身を乗り出すと、ブラインドに手を伸ばして、それを下まで降ろした。

その時、ちよつと彼女を上から見下ろすような格好になった。

彼女の綺麗な髪が肩から胸に掛かっている。

白いサマーセーターの間からワンピースの大胆に開いた胸元が覗いて、その奥に……

白い肌の綺麗な膨らみが、そのまま見えていた。

瞬間、ドクンと心臓が鳴った。

あ……？ う、うわぁー！

彼女、ブラを付けてないんだ！ ここからだ、丸見えだよ！

奥にはチラチラとピンク色の部分も覗いていた。

僕の心臓が、ドクドクと音を叩きだした。

あれ？ でも、だって……

彼女、学校ではちゃんとブラしてたよな？

僕は、彼女の夏服に透けるブラの線を思い出して、それはそれでドキドキが増していく。

まして、今、目の下に、彼女の裸の胸がちらちらと覗いているんだ。

ブラインドを下ろした変な体勢のまま、やばいと思ってても、彼女の胸から目を離すことが出来なかった。

心臓が早鐘のように拍っている。

「あれ？ どうしたの？」

彼女が上目づかいに僕を振り返った。

うわあ！ 慌てて、彼女の目と胸を交互に見つめてしまった。

「あつ……」

彼女が僕の見ているものに気づいて、いきなり頬を染めた。

僕は、ようやく顔を逸らした。これ以上見ていたら、心臓が爆発しそうだ。

体制を立て直して吊革につかまった。

恐る恐る彼女の方を振り返る。彼女は俯いていた。

膝の上で帽子を持つ手が、なんだか震えて見えた。

それから、彼女が顔をあげた。頬が綺麗にピンクに染まっている。

彼女は僕を見上げ、恥ずかしそうに微笑んだ。

「あは、あはは……」

お互い、間の抜けた笑い声を出して、それから、俯いてしまった。なぜだろう？ なんだか、こっちまで、すごく恥ずかしい。

目的の駅に着くまで、彼女の方をまともに見ることが出来なかった。

今は見えないけれど、少し彼女に近づけば、座った彼女の胸元から、彼女の生の胸が見えてしまう。

ちよつと電車が揺れたりしたら、どうすりゃいいんだ？  
だから、出来るだけ窓の外を見つめていた。

彼女は時々顔をあげたようだけど、恥ずかしかったのか、ほとんど俯いていたようだった。

駅に着いて改札を出た。映画館まで少し歩かないといけない。

なんだか最初の勢いを無くして、僕は少しもじもじしていた。  
ダメだな。彼女の秘密は知ってるのに、こんなに動揺するなんて。

「あ、あの……」

「え？」

彼女が恐る恐る言った。

「手を、つないでくれる？」

「あー」

僕は彼女のその言葉に救われた思いだった。

「うん。いいよ」

そういつて彼女が控えめにさし出した手を取った。

柔らかな感触。それだけで、また胸がドキドキしてくる。

手をつないで一緒に歩き出したら、初めてわかった。

傍らを歩く彼女の胸元は電車の中でよりも、はるかに近くにあつて、もつとはつきり見えるもんなんだ。

歩くたびに揺れるその胸が気になつて、眼のやり場に困る。

でも、どうしても、ちらちらと見てしまふ。

いったい、どうすりゃいいんだよ！

「えっと、あのさ……」

「う、うん？」

「その……その、む……胸、だけど……」

「あ、ああ……そう、そうなの。えっと……」

彼女もうつわずつた声で答えた。彼女がつないだ手に力を込めたこ



とがわかった。

僕は思わず振り返る。でも彼女は僕を見ないで言った。

「初めての、デ、デートだから、その、思い切って……」

お、思い切って？ なに？

「つけないで来ようと思って……」

彼女の頬が真っ赤になっている。

僕は思った。

初めてのデートだから、つけないって？

……い、いや、少しは想像してたけど、でも……やっぱり動揺してしまう。

だって、勝負下着って言うのは聞いたことがあるけど、これって、やっぱり、普通じゃないよなあ？

ていうか、なんていうか……

あれ？

ということは、下も、やっぱり？

恥ずかしくて、それはとても訊けそうになかった。

2―まさか？ここで？！―

映画館で僕らが選んだのは、テレビの連続ドラマから映画化された話題の作品。

事件ものだけど、恋あり笑いありの楽しい作品のはずだ。

チケットを買って、劇場に入る。

少し暗い場内を手をつないで移動して、座席に着いた。

席は一番後ろだけど中央で、それほど広くない劇場だからちょうどいい場所だった。

「よかったね、真ん中で」

僕は出来るだけ明るく言った。

とにかく、さっきまでの自分の恥ずかしさを振り払おうと思った。そうして、ちよつとぎくしゃくした雰囲気や元に戻せれば、また、いつも通りになるはずだ。

彼女は、

「うん」

と小さく肯いた。

まだ、なんだか硬いなあ。

映画が楽しかったらいいんだけど。そしたら、また、元のように明るくなれるはずだよな。

その時は、そう思っていた。

予告編が始まって場内が暗くなった。

チラッと彼女を見るとスクリーンを見つめる横顔が、暗い中、映画の照り返しをうけて浮かび上がっている。

その瞳がキラキラと輝いて見えて、僕はあらためて、彼女のことを綺麗だと思った。

映画が始まって、どのくらい経っただろう？

物語のおもしろさに、いつの間にかスクリーンに集中していた。その意識が、ふっと我に返った。

なぜなら、僕の右手に、彼女の手が重なったからだ。

ドキツとして、僕の意識の半分が、彼女と触れる自分の手の甲に集まった。

映画館で好きな人の手を握って見るシチュエーション。

そんなあこがれの瞬間。急にまた胸がドキドキしてきた。

僕はスクリーンを見つめながら、彼女の手を握り返そうと思って、右手を動かした。

その時、僕の腕がそのまま彼女に引っ張られる。

あれ？ なんだろう？

そのまま彼女は僕の腕を引き寄せた。そして……。

掌に、すべすべした柔らかい感覚が触れた。

え？

驚いて、彼女を振り返った。

「なっ?!」

さらに驚愕。僕は目を見張った。

うわあああ。

えっと、えっと、これって……。

いきなり混乱してしまった。

いつの間にか、彼女のワンピースのボタンが、上からいくつか外されていた。

はだけた服が捲れて、ブラをしていない彼女のきれいな胸が一つ、暗い中で露になっている。

そしてもう片方の胸に……僕の手が押し当てられていた。

つまり、肌に、直接！

彼女の両手が、抱くように僕の右手を彼女の左胸に押し付ける。

掌に、彼女の胸の柔らかさと、小さな堅い感触が同時にした。

あまりのことに、声も出ない。

彼女は僕の方を向いて、でも、恥ずかしそうに目を瞑っていた。

ど、どうすればいいんだろう？ 僕のこの手は？

このまま？ それとも、なにかしないと、いけないのか？

僕は、手を離すこともできず固まっていた。心臓が痛いほどドキドキしている。

暗いとはいえ、ここは、まわりに人のいる映画館の中だ。

幸い最後列で、隣にも他の人はいないけれど、まさか、こんなところで、胸を出すなんて？！

これって、大胆すぎないか？

彼女、いつも、こんなことしてるんだろうか？ こんな、恥ずかしいこと？

彼女が、瞑っていた目を薄く開けた。

それから映画の音響に消えてしまいそうな小さな声で言った。

「お、お願い……触って」

うつ！ さ、触る？ それって、どういう？

……動かせばいいのかな？

僕は恐る恐る掌に力を入れてみる。

弾力のあるそれが僕の手にとって形を変えるようだった。

「あっ」

彼女が声を漏らした。

その声が、やけに大きく聞こえて、びくつとして掌の動きを止めた。

「あ、あの……もつと」

彼女の恥ずかしそうな声。僕はまたそろそろと手を動かす。

「あ、うん……あ、あ、あん」

ほんとはそんなに大きな声じゃないはずなのに、彼女のその声が、とても大きく聞こえた。

まわりに気づかれないか、ビクビクしてしまう。

止せばいいのにキョロキョロと首を振って、周りを見てしまう。心臓が早鐘のように鳴っていた。

その時、いきなり、映画の大音響の効果音が響いた。

「うわああああ！」

僕は驚いて、思わず彼女から手を離れた。

そのまま自分の手を引っ込める。その手をポケットに突っ込んでしまった。

それから、とてももう一度、彼女の方を見ることはできなかった。

ずっと目はスクリーンを向いていた。

でも、映画の内容なんて少しも理解できなかった。

心臓がいつまでもドキドキして、となりの彼女が気になった。

そのくせ、やっぱり彼女を見ることができなかった。

僕はただ、映画が終わるまでの残りの時間を、半ば安心して過ごした。

場内が明るくなって、やっと我に返った。

恐る恐る彼女を振り返る。

もう、服はちゃんとしていて、でも、彼女は俯いたままだった。

「い、行こうか？」

僕は、ようやくそれだけ言った。

ふたりで映画館を出て、でも、もう手を繋ぐことが出来なかった。あまりに予想以上の出来事に、驚きと恥ずかしさで、僕は自分でもどうすればいいのかわからなかった。

僕たちは無言で、行きの電車の中で決めていたファミレスに向かって歩き出した。



### 3―僕に足りないもの―

「コ、コーヒーください」

「ホットですか？」

「え？ あ、はい……」

ファミレスで注文しながら、まだ混乱していた。

夏なのに、ホットコーヒーを頼んでしまったことに気が付いたのは、ウェイトレスさんが、彼女の注文を取り終わって、戻っていく後ろ姿を見たときだった。

「あつ、待つて」

……遅かった。……ま、まあ、いいか。

僕は大きく溜息をついた。テーブルで向かい合っている彼女の肩がぴくつと揺れた。

彼女は店に入ってからもずっと俯いていた。  
なんだか体を小さくしているように見える。

僕は、その態度に、さっきのことがあったから、恥ずかしすぎて固まってるんだと思った。

そりゃ、そうだよな。

やっぱり、いくらなんでも、恥ずかしいよな。  
僕自身が、死ぬほど恥ずかしかったんだから。彼女だって……。

そう思ったら、少し心に余裕が出てきた。

うん。ここは、僕が彼女を和らげてあげないと。

彼女の秘密を知ってるのは僕なんだから。

そうだよ。しっかりしよう。

「あ、あのさ。映画、よかったよね」

そういつて話を切りだした。

彼女が怖ず怖ずと顔をあげる。その表情が、なんだかとても硬か

った。

あれ？　と思ったけれど、かまわず話し出した。口を閉じたら、また、話せなくなりそうだった。

「ほら、えっと、なんだっけ？　あの最初の場面……」

僕は覚えてるかぎりの場面について話した。

あれからあとの話はまったく覚えてないのだけれど。

彼女は、時々小さく肯くだけだった。

表情はやっぱ硬い。もしかしたら、暗い？

どうしたら、待ち合わせの時のように笑ってくれるんだろう？

僕は焦ってきた。

そのうち、注文したものが届いた。

僕の季節はずれのホットコーヒーに、彼女のは、かわいらしいチョコレートパフェだった。

彼女の表情が少しほころんだ。僕は、それを見逃さなかった。

「へえ。美味しそうだね。チョコパフェ好きなの？」

「う、うん。好き……」

こんな状況なのに、彼女の“好き”の一言に不覚にも反応してしまっ

た。

「あー、いいなあ」

僕は少しおどけて言った。

彼女はそんな僕を見つめて、それから、おずおずと言った。

「た、食べる？」

「え？」

彼女はスプーンでパフェをすくうと、僕の方へ、すっとさしだした。

え？　あつ！　これって！

いわゆる一つの、アーンですか？

僕の頭の中に、そんなアニメやドラマの場面が浮かぶ。

でも、それが目の前にあるなんて！　さっきとは違う意味で、め



ちや恥ずかしい。

でも彼女は、いやに真剣な表情で僕を見ていた。

えっと、これは、やっぱり、そのまま、口に……。

やけに思考の回路が遅いような気がする。自分の頬が熱くなってくるのを感じた。

僕は、キョロキョロと他のテーブルを見回し、誰も注目してないことを確認した。

それから、そろそろと差し出されたスプーンに顔を近づけようとする。

見つめる彼女の視線が恥ずかしくて、目をつぶった。

そして、口を開けようとした。その時。

かちゃん、と音が鳴った。

あれ？ と思つて目を開ける。

テーブルの上に、スプーンが転がって、落ちたパフェが広がっていた。

「え？」

なんだ？

彼女を見ると、俯いて、体を震わせていた。

え？ あれ？ 彼女、どうしたんだ？

「えっと、どうしたの？ 何かあった？ どこか痛い？」

彼女が首を振る。その瞳から何かが落ちたような気がした。

「え？ どうしたの？ もしかして、泣いてる？ ねえ！」

僕は思わず腕を伸ばして彼女の頬に触ろうとした。

彼女がビクツと体をひいて、その拍子に顔をあげる。

その面が、哀しそうな表情で歪んでいた。

僕の心臓がきゅっと痛くなった。

え？ え？ いったい、なんで、こんな表情してるんだ？

「どうしたんだよ？ なんで、泣いてるんだ？」

「だって……だって……」

彼女は苦しそうに声を出した。こんな苦しそうな声、僕まで苦し  
なってくる。

「だって……やっぱり、き、嫌われちゃったから……」  
へ？ なんだって？

「……もう、わたしのこと……いやになっちゃったんだよね？」  
頭が混乱した。

彼女、なにを言ってるんだ？

「どうして、そんな？！」

「ううん。わ、わかるの」  
いや、ちよつと、待て。

「なにが分かるって？ そんなこと、あるはずないだろ。僕は、君  
のこと、す、す……」

「もう……嘘なんかつかなくていいよ」

彼女は絞り出すように言った。その言葉が、とても哀しく響く。  
でも、僕には、彼女の言ってることが全然わからない。

嘘？ 嘘だって？

「嘘なんか、つくはずないじゃないか！」

僕の言葉に彼女は目にいっぱい涙の粒を湛えながら、でも、言っ  
た。

「だって、だって……わたしのこと、ちゃんと、見てくれないじゃ  
ない。わたしのこと触ってくれないじゃない。電車の中でも、映画  
館の中でも、いまも……」

「なっ！ それは……」

「わたし、ものすごく恥ずかしくて、でも、初めてのデートだから、  
喜んで欲しくて……あなたも、好きって言ってくれたから、だから  
……うぐ……でも、全然……うぐ」

彼女は嗚咽を漏らして泣き始めた。

僕は、彼女の言ったことに驚いて、もう言葉も出せず、固まっ  
てしまった。

……誤解だ。全部、彼女の誤解だ。

彼女のことをいやになったから、彼女を見れなかったわけじゃない。

そんなの全くの逆。

彼女のが好きだから、恥ずかしくて、ドキドキして、眩しくて、だから、まともに彼女を見れなかったんだ。

そんなこと、当然じゃないか。

そうだろう？

でも……と思う。

こんなふうに彼女を泣かしてしまって、こんなふうに彼女に誤解させたのは、やっぱり僕のせいだ。

彼女の秘密は知ってたのに。

エッチな女の子が好きだと言ったのは僕自身なのに。

それなのに、僕は、彼女をちゃんと見てあげてなかった。

ちゃんと受け止めてあげてなかった。

それは、確かに、彼女のことを、まだちゃんとわかってなかったからかもしれない。

予想外のことに驚いて、慌ててしまったからかもしれない。

でもたぶん、それもこれも全て合わせて、僕は……足らなかったんだ。

覚悟が……彼女と付合う、本当の覚悟が。

だから、それなら……。

僕は一つ深呼吸をした。

目の前で泣きながら頬を拭っている彼女をあらためて見つめる。

その姿がたまらなく愛おしく感じた。

僕は彼女の腕を取った。

「行こう！」

力強く言った。

「え？」

驚く彼女を強引に立ち上がらせる。

そのまま彼女の腕を組んで、レジに向かって歩き出した。

#### 4ードキドキしようー

僕は困惑する彼女を引つ張るようにして道を歩いた。  
彼女の涙はもう止まっていた。

「ねえ？ どこに行くの？」

僕は、はっきりと答えた。

「君を、ちゃんと見れるところ」

「え？」

彼女が驚いた表情をする。

「それって……どこ？」

「付いてきて」

僕はそれだけ言って足を早めた。

受付で部屋番号を聞いて、ついでに飲み物の注文もすませた。  
扉を引いて部屋にはいる。

「おいでよ」

「う、うん」

彼女の後ろで扉がぱたんと閉まった。

部屋には二面にソファと真ん中にテーブル。

その奥におなじみの音響設備があった。

そう、僕はカラオケ屋に来たんだ。

部屋に入った彼女が立ったまま僕を見ている。僕も立ったまま彼女を見つめた。

「カラオケ好きだって言ってたよね？」

そういつて話を切りだした。

「う、うん。そうだけど。でも……」

「ごめん！」

彼女の言葉を遮って、僕は頭を下げた。

「ごめん。僕が、悪いんだ」

ほんの少しの沈黙。それから、

「……やっぱり」

彼女の哀しそうな声が聞こえた。僕は慌てて頭を上げた。

「違う！ 違う！ そうじゃないよ。聞いて！」

僕の必死の言葉に彼女は目を上げた。

「僕が謝ったのは、その……君をちゃんと見てあげなかったから。見られなかったから。でもそれは、嫌いになったからじゃないよ」

「ほんとに？」

「もちろん！」

彼女が首を傾げる。

「じゃあ、どうして？」

「……恥ずかしかったんだ。ものすごく」

僕の言葉に、彼女は思いがけないことを聞いたというような、ポカンとした表情をした。

「君の姿を見てびっくりしちゃったこともある。思ってた以上に恥ずかしくて、君を見てると心臓が痛くて、それで、まともに君を見れなかったんだ」

彼女はしばらく僕を見つめ、そして、

「……男の子も、恥ずかしいの？」

ほんとうにビックリしたように聞いてきた。

「うん。そりゃあね」

「そう……なんだ」

彼女の表情が初めて柔らかくなった。

「男の子も恥ずかしくなるんだ……わたし、全然知らなかった」

そりゃあ、人によって差はあると思うけど、でも、僕は、

「大好きな人の姿を見れば、ドキドキするよ」

僕の言葉に彼女の頬がぼくと染まった。

それを見ながら僕の心臓もまたドキドキしてくる。

まだもう一つ、どうしても言わなきゃいけないことがあった。

「それと、謝ったわけは、もう一つある」

「え？」

彼女がもう一度僕を見つめる。

「僕は、まだ……覚悟が足りなかったんだ」

「覚悟？」

彼女が怪訝な表情をする。

「うん。君をちゃんと受け止める覚悟。あの時、あんなに大見得切ったくせに、ちゃんとわかってなかったんだ」

彼女はまた首を傾げている。

「だから、ごめん。だけど、もう、決めたから」

僕の胸が急速に緊張してくる。

「え？ なにを？」

彼女が疑問を口にする。

僕はありったけの想いを込めて、その言葉と言った。

「もっともっと、一緒に、ドキドキしよう！」

そう、たとえ恥ずかしさで胸が苦しくなっても、ちゃんと彼女と一緒にドキドキするんだ。

彼女と一緒に恥ずかしがるんだ。

もう、彼女から目を離さない。

僕はそう決めた。

その言葉で、彼女の表情が一瞬驚いて、それから、ぱあっと明るく変わった。

「よかったあ」

彼女が笑顔で言った。

「あなたに振られたら、どうしようかと思った」

それを聞いて、僕も心の底からよかったと思った。

そして、思い出した。ここに来た理由。さっきの約束。恥ずかしくても、ドキドキしても言うぞ。

「あの、ここに来るとき言ったこと……」

「え？」

「君を……みせて」

「あっ！」

彼女が両手で頬を押さえた。

「ここで？」

「うん」

「でも、明るい……」

そういつて彼女は逡巡する。

僕は黙って彼女を見つめた。

彼女は一度目をつぶって、それから開いた。

そして……ボタンに手をかけた。

ワンピースのボタンが上から順番にはずされていく。

その度に彼女の白い肌がだんだん露に見えてくる。

僕はドキドキしながらそれを見つめていた。

俯いて、ボタンをはずす彼女の指が震えている。

下のボタンをはずすために屈んだ彼女の胸元にはつきりと形のいい乳房が見える。

一番下の最後のボタンをはずして、彼女がもう一度背筋を伸ばした。

そして、おずおずと服の前を上げた。

下着をまったくつけてない、生まれたままの彼女の姿が僕の目の前に露わになった。

まるで、グラビアアイドルのような綺麗なプロポーション。

そして、白い綺麗な胸も、お腹も、長い太腿も、上気したように仄かに赤く色づいていた。



真っ赤に頬を染めた彼女が恥ずかしそうに言った。

「ど、どう？ ドキドキする？」

「うん。すごく、ドキドキしてる」

「う、うれしい」

彼女が恥ずかしさに耐えられないのか、小刻みに震え始めた。

でも、どうせなら……

「映画館の時みたいに、してもいい？」

彼女はちよつと目を見開いて、それから、小さく肯いた。

僕は彼女に触れるほど近づいた。彼女が震えながら目を閉じる。

ドキドキしながら、掌を、彼女の形のいい乳房に副えた。

「あ、あん」

たちまち彼女の口から吐息が漏れた。それが、なんだか嬉しく感じた。

彼女が掴んでいた自分の服の端を離して、僕の肩を掴んだ。彼女の膝が震えている。

「あ……もう、ダメかも……立ってられないよ」

その言葉に僕は片腕を背中に戻して、彼女を支えようとした。

その時……

キイ、という音がして、彼女の背後で部屋の扉が開いた。

「うわ！」

心臓が飛び出そうで、思わず声が出た。

「お飲物持ってきました」

「えっ?! あ! うん！」

彼女が声を上げて、その直後、倒れるように座り込んだ。

僕はその重みを支えながら一緒にしゃがみ込む。とっさに彼女の服の前を引っ張った。

「あれ? お客さん、どうかしましたか？」

飲み物を運んでくれた従業員の女性が聞いてきた。

「う……あ……うん」

彼女のくぐもった声。僕の腕の中で彼女の体がびくつと震える。  
「あ、いえ……ちよつと、彼女、くらつときたみたいで。そ、外、暑かったから。たぶん、少し休めば治ります」

「そうですか。じゃあ、何かあつたら知らせてください」

そういつて、女性は飲み物を置くと出ていった。

「大丈夫？」

僕は急いで彼女に聞いた。

「ああ……うん」

しゃがんでいることが出来ず、彼女はゆかに尻餅をついた。

ワンピースがもう一度はだけで、彼女の裸が僕の目の下で露わになった。

彼女が赤い顔をあげた。少し目がとろんとしている。

「こ、声……漏れなかったかな？」

「え？」

彼女の裸をドキドキしながら見ていた。

「だって、ビックリして、わたし……イッちゃったから」

あ、ああ……やっぱり、そうだったんだ。

「よ、よかった？」

「……うん。とっても」

そして彼女は、羞恥で真っ赤に染まった顔で、えへつと、微笑んだ。

とたんに、僕の胸がカーと熱くなる。

うわあ！　かわいい！　この笑顔！

今日見た彼女の笑顔の中で、一番だ！

僕はたまらず彼女を抱きしめた。

そして……2度目のキスは、今度は僕から彼女にした。

それから、2時間。

カラオケ店の個室で、僕らが、なにをしたかというと、それは……

当然、歌を唱ったよ。

彼女は、とてもカラオケが好きらしい。

僕も唱ったけれど、10倍ぐらいたくさん彼女が唱った。

マイクを持って、踊りながら、僕に手を振って唱う彼女。

とても、いきいきして、楽しそうで、キラキラしている。

時たま彼女がくるっと回って、スカートからあそこやお尻が覗くんだけど、もしかして、わざとやってるのかな？

でも、もう、そのぐらいじゃ、驚かないぞ。ドキドキはするけど。

うん。最初に思ったとおり、今日はとても素敵な日になったと思う。

どうかな？

これが、僕たちの初デートだったんだ。

おわり

#### 4ードキドキしようー（後書き）

僕と彼女の初デート編、どうだったでしょうか？

前回より、エッチ度は少しは上がったのか？

『春エロス2008』企画に少しでも貢献できてれば、嬉しいです。  
ありがとうございました。

春エロス企画終了しました。

読んでいただいた方、投票していただいた方、ありがとうございました。  
ました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0240e/>

---

彼女の秘密 2

2010年10月8日14時38分発行